



1990年(平成二年)
3月号(No. 537)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 今日、この頃……………小西政継…(1)
横さんからの郵便抄……………小野 幸…(2)
海外の山……………(3)
「タンボチュ僧院の再建」
東西南北……………(3)
「土曜会・今昔」「スイスのゴルフ場とスーパークロカンスキー」「ウエストンとオベリスク」「日和田山、物見山」「会員通信特集2」
タンボチュ僧院再建募金協力者
ご芳名……………(5)
自然保護随想……………小西 毅…(7)
計報 小原勝郎……………(8)
図書紹介……………(8)
「越後山岳第八号」「鳥海考」「エヴェレスト初登頂の謎」「雲の上の支配人」
報告……………(10)
「羽衣のお餅」「第1回藤木祭開催」「三水会新年山行」「関西支部五十年史の発行について」「雨具をめぐるシンポジウム(3)」「第27回木暮理太郎翁碑前懇親会報告と次回の予告」
ルーム日誌、図書受入報告、お知らせ……………(14)
新入会員、住所表示変更……………(15)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日 13時～20時

お知らせテブ電話

234 六六五九

今日、この頃

小西政継

一九八三年秋のエベレスト南稜無酸素登攀を最後に高峰への本格的な登山活動を中断してからも六年にもなる。山学同志会で十八歳から登山にのめりこみ、いちおう区切りがついて、

内容はどうも似たりよったりで、頂上に立っても山の名前が違っているだけと感じるようになったことである。

おこられるかもしれないが、僕が世界のレベルを目指してカッカしてた若い時代には八〇〇〇峰の一般ルートを酸素を吸って登る登頂は登山じゃない、トランシーバーを握って指揮するだけの隊長は頭がおかしいと思っ

た。日本登山界の中で、はたからみたら逆にこっちの方が狂っているわけ

があるが、若い頃夢中になって読んだフランス隊の『アンナプルナ登頂』『アコンカグア南壁』『ジャヌー北壁』『マカルー登頂』の影響である。こんな極

端な見方は、この歳になってもまだ少し残ちゃってるので、五大陸最高峰登頂みたいなものには「馬鹿」となり、人

からいやな顔をされてしまう。

仕事に専念して六年にもなる(とりたててたいしたことややってるわけではないのだが)。気合をこめた山らしい山は一度も登っていない。五十歳になった時、身体が動く最終ラウンドに入

ったかと思いはじめ、また少々山に登りたくなってきた。ジャヌー北壁のド真中を単独で完登する凄腕男が出現するまでに発展した世界の登山界に、今の僕の力はいまにも非力である。若き日々の自分をこの際さりとすてさて、これからは気軽に楽しむことに徹した登山をやってみようとなった。

昨年、その第一歩としてシシャパンマの一般ルートからの許可をとった。出発の段階でラサ、続いて北京の天安門に行ってみた。初めてのバミール高原は壮大で、果しなく広がる大草原と咲き乱れる高山植物の美しさが新鮮だったのと、現在のモスクワの生活物資不足というソ連の苦しみをいやという程みせつけられた次第である。

仕事のあい間をぬって今年はさて、
どこの山に登ろうかなと考えている今

楨さんからのお便り抄

小野 幸

日この頃である。
(一九九〇年一月三日記)

なくなられた楨有恒名誉会員からのお便りは戦後からだけでも四、五十通はいただいています。それらのお便りの中から年代順に数通を記させていただき、常に正しい文をお書きになられた氏の思い出にさせていただきます。存じます。なお、このことにつきまして

は奥様のお許しを得ました。
新年を賀し奉ります。平素御無沙汰にて失礼のみいたしてをります。
去十一月、二年半の信州生活を切上げ表記へ転住いたしました。お次手の折もあらば是非お立寄り下さい。(昭和二三、一、一二)

拝復此度拙著復刻に当り御懇篤なる御言葉を賜り洵に忝けなく厚く御礼申上候。今更申上ぐる迄もなく真にお耻づかしきものにて、加ふるに紙など思ふにまかせず遺憾に存居候。弊地御来遊の折には小宅にも御来駕下されたくお侍仕候。先は御礼迄厚く申上候。
(二三、九、二三)

謹啓時下愈々御清健奉賀候。偕、唐突の儀或は御迷惑とは存じ候へ共、左記に關し御垂教を賜はりたく奉願候。

一、小生儀去四月より千葉県佐倉町にて鶏用の醗酵飼料製造事業に關係いたしをり候

二、右飼料製品は粗粉状のものにてクラフト紙二重袋に入れ十文字に縄をかけて發送いたしをり候

三、然るに手かぎを使用のため破損いたすもの多く

四、其為め縄を廃止いたしたるに(運)より扱ひにくしとの抗議を受けたる次第に候

五、尚更らに佐倉駅の通はサーヴィス頗る悪しく、出荷を数日も止め置くことなど煩繁にて、東北仙台迄二十日以上の日数を要しをり尠からず困却罷存候

以上の如き出荷現狀にて此際荷物を貴地即、成田駅に持ち込んでとの考へを懐くに至り申候。以上の如き諸点をお含み下され貴地に何等かの御縁故

にて信頼するにたる運送業者無之候や品物はオート三輪車にて工場より店先迄弊方より届け可申候。

尚、紙袋に代へて木箱を使用せんと目下考慮中に候へ共幾分時日を可要候。先は右御願迄に候。草々不備。
(二五、七、一二)

謹啓寒冷の砌愈々御清健の段奉慶賀候。陳者は平素御無音にのみ過ぎ失礼いたしをり候にも不拘唐突なる御願を申上げ恐縮に不堪候。

其儀と申候は愚生甥にてA大学農獣医学部教授Bと申すもの有之、同人よりの依頼にて、担当のCなる学生来春同大学卒業の見込にて今回貴庁農事部就職方希望の由に候ところ何分右方面に縁故人とて無之途方にくれをる趣に御座候。聞けば既に貴庁農業改良普及員資格試験も合格いたしをることにて拙甥の言によれば学術性格共に頗る優秀なる青年と存申候。何分にも就職の難関は一通りならざる現今のこととて、或は農事部方面への御紹介にても相願ひ得まじくやとの勝手なる御願に御座候。先は乍略儀御願までに御座候。敬具。(三一、一二、九)

拝復御玉書を賜り忝けなく拝誦いたしました。拝受のパンフレットや絵葉書により愈々御活躍の趣とお慶び申し

上げます。ほんとうによいお仕事に御尽しと敬服申し上げます。また三田評論の切抜きを御恵与下され御心遣ひのほど幾重にもありがたく厚く御礼申し上げます。有楽町においで由、ときたま上京の折、同所の糖業協会に参りますのでその節はお伺ひいたします。先は略儀乍ら御礼まで申し上げ御無沙汰お詫申し上げます。草々不一。(年不明七円はがき、五、一)

拝復茨木さんの思い出の模様を詳細お知らせ下され洵にありがたく厚く御礼申し上げます。晩秋の一日御墓前にて知友各位御参会、夫々の思い出を語られました御催しのお世話を忝けなく存じます。山に逝かれてもう幾年になりましようか。御遺児も健やかに御成長の由。往年を偲びます。先はとりあえず幾重にもありがたく御礼まで申し上げます。(五二、一二、一一)



(カットも筆者)



土曜会・今昔

坂倉登喜子

日本山岳会の中に親睦を目的として毎週土曜日に集って、懇談していた土曜会と言う会があった。

この会は当時お茶の水駅前にあった日本体育協会の敷地内に、日本山岳会の山小屋風のルームが、昭和二十四年三月に、会員の寄付によって建てられたので、その二階が土曜会の集會室となり、一階から垂直の梯子で登るようになっていた。

このルーム建設に努力された故藤島敏男さんが中心になって、入沢、成瀬、浜野、藤井、林、加藤、神谷(以上故人)織内、関根氏等が、できたばかりのルーム二階に、土曜日の午後集って歓談されたのが始まりだそう、それから既に四十年の年月が流れ、ルームの移転はあったにしても、現在まで続いているのだから、その歴史は古

海外の山

タンボチエ僧院の再建

かつてチヨモランマの南北には、それぞれチベットの僧院(そのころ「ラマ教」という表現はやめよう)の壮麗な僧院が建っていた。北側には、ロンブク氷河わきにロンブク僧院、南のネパール側にはクーンブ地方を代表するタンボチエ僧院である。ロンブク僧院は標高五千、タンボチエ僧院は三八七〇と、驚くべき高地にある。

チベットの僧院は古派と呼ばれるニンマ派に属するロンブク僧院が無難はるかに早く約三百年前といわれる一建てられ、一時は三百人を越すラマたちが北壁を仰ぎながら瞑想にふけていた。

タンボチエの方は後にグルー・ラマと呼ばれるチャタン・チョータルが一九一四年にロンブク僧院で修業を始めたのがきっかけである。六人の子の父であったチョータルはそのうち五人までを子供時代になくしたことから妻の死をきっかけに宗教の道に入ったとされる。

一九一六年に建設が始まったタンボチエ僧院は一九一九年に完成した。一九三四年にこの地方を襲った大地震で一度は崩壊したが、ロンブク僧院の院長の教えで再建され、その際規模も拡大された。近年になり一九八七年には新たに小学校が付属施設として建てられた。

一九四九年の中華人民共和国建国以来、チベット仏教は迫害を受け続け、宗教を「旧四」の一つとして攻撃したプロレタリア文化大革命の十年間には、寺院という寺院はことごとく破壊された。タンボチエ僧院の親と言う

べきロンブク僧院もいまは、壁仕切りを残すだけの無残な廢墟と化している。

一九八九年一月十九日夜、こんどはタンボチエ僧院に不幸が起きた。ラマたちのほとんどがカトマンズでの儀式に出席して不在だった。僧院事務所から出火し、折からの強風でまたたく間に火が僧院を包んだ。建物だけでなく、数えきれないほどのタンカ(仏画)、経文、そして貴重な壁画が燃え尽きた。漏電が原因とされている。チヨモランマをはさんでそびえ立っていた二つの僧院がこうして消えた。

クーンブの住民の心の拠り所であり、訪れる外国人にもエベレスト街道の象徴として親しまれてきたタンボチエ僧院を復活させよう、そのためにヒマラヤを愛する世界の人々が行動を起こそう、と国際的な再建運動が間もなく広がりはじめた。エベレスト初登頂者のヒラリー卿の呼びかけで各国にそのための銀行口座が設けられた。募金目標は内装や仏具購入費などを含め計八十万ドル。

日本ではできれば一千万円を集めたい、というのが趣旨に賛同した日本山岳協会、日本山岳会、日本ヒマラヤ協会、日本勤労者山岳連盟、日本ネパール協会の五団体の心意気である。二月初めまでにそのうち二百五十万円ほどが集まった、と聞く。

ナムチエバザールをいったん下り、急な山道を登りきった瞬間眼前に広がるタンボチエ僧院と背景のエベレスト、ローツエ、そしてアマダグラムの景観は、地球を代表する美しいものの一つではないかと思う。

仏教は、この地で人々に穏やかな心をもたらし続けてきた。僧院の二度目の再建がそれを支えるなら、私たちの志は十分報われるだろう。

(江本嘉伸)

海外の山

い訳である。

昔土曜日は正午になると、丸の内界隈で、ドーンと大砲の音がして、会社は半日で終り、「半ドン」と言って、午後はお休みになっていた。

日本山岳会の中にこの半日をクラブルームに集って、山の話を語り合い、日本山岳会本来のクラブイズムを楽しむ土曜会が、毎週催されていた。

この会の世話役は山岳会の大先輩故神谷恭氏で、当時浅草の雷門近くに神谷バーと言うお店があったのにちなみJAC土曜会神谷バーと称して、土曜日は知名登山家の顔が揃って、JACの懇談会的存在で、沢山の方々が集って、何時も賑わっていた。

私は昭和二十二年に日本交通公社に入社し、神田須田町の交通博物館で副館長をしておられた山下一夫氏と入沢文明氏の紹介で日本山岳会に入会した。そしてお茶の水ルームのこの土曜会に恐る恐る出席して、大勢の大先輩のお話を小さくなって聞いていたものだった。

丁度私が入会すると間もなく、東京在住の会員のための親睦と指導が目的で、東京支部が発足し、私もその発起人の一人とされて直ぐ役付を仰せつかり、集金、編集、婦人部などの初期の仕事に携り、勤務先から五分ばかりのお茶の水ルームには、毎日仕事が終わる

と入り浸りで、庶務や支部報の編集をさせて頂いた。それに付いても当時の土曜会は、登山家たちの社交場で、神谷氏がことのほか皆さんを面倒よく迎えてくださったので、私も毎週帰りに土曜日には必ず顔を出して、皆さんとの交流を図ることができた。

私が入会してお会いした歴代会長は殆ど土曜会メンバーで、横先生や松方日高、別宮氏等歴代会長の皆様にも出合うことができ、女流登山家では故村井米子、現在も高齢の今井喜美子女史等大先輩とも出合うことができた。

当時東京支部役員の中で大学OBの若手会員のご指導を受け、仕事も一緒に協力し合い、ルームへ行くのがとても楽しみだった時代があった。

今では知名登山家が殆ど亡くなられ淋しい限りだが、その当時大学OBで支部で活動されていた方々が、今山岳会の立派な地位に立たれ、会を維持しておられるので、年月は流れ、時代は変わっても、かつて若かりし頃の方々が今後を担って、活躍して下さっていると思うと、なつかしくもあり、また日本山岳会の発展を嬉しいものと思う。さて土曜会は私が入会した後から続いている訳で、集る方も高齢化してその殆どが故人になられ、淋しい極みだが、四十年の歴史の中に残る思い出は、いろいろと楽しくよみがえってくる。

次代に残そう美しい山と溪

る。

神谷さん時代に土曜日が主体で催した、ルームの三角芝生の庭の屋外ビールパーティや、忘年クリスマスパーティーは、私たち婦人部がお年唄いして、盛大に催したもので、神谷さんと私たちの交流と協力あつての行事だったのが、今もこの催しを婦懇の皆さんが受け継いで下さっているのが嬉しく思っている。その当時のルームの管理人は秩父の精通者、原全教夫妻だったの

で、夜おそくまで会の仕事をして手伝って頂いたり、パーティの時は大変なお世話になったものだった。

昭和二十四年に支部の中で、女性の集りや、若い会員の親睦や指導を目的の集会を催していたのが、後に婦人懇談会になり、三水会(第三水曜日に集る会)となった訳で、そのルーツは東京支部が生みの親と言うことである。

その当時の土曜会神谷バーの主人、神谷さんは大変円満で心優しい方で、土曜会と婦人部はいつも手を取り合っ

の大恩人として、忘れ得ぬ大先輩の人だ。

その育ての親、神谷先輩が大切に熱情をかたむけていた土曜会が、時代のなり行きで、土曜半日がなくなり休日になる会社も多くなり、土曜日の半日の意味がなくなり、ごく少数の会員が後を続けて集っているのが現状である。この度神谷先輩に恩義のある方々で、是非土曜会に会長のご出席を願って、多勢の皆様と懇談会を催して、日本山岳会本来のクラブイズムを楽しみ、集りと言う声があつたので、左記により中高年会員懇談会を催すことになった。

日本山岳会中、定年後フリー会員も多いと思われるので、山の思い出や中高年山行についての語り合いの場である土曜会に是非ルームにお集り下さい。神谷さんの意志を継ぎ大勢の方の会として続けてゆきたいと思うので、もしご賛同の会員は、日本山岳会会長を囲む懇談会にご出席願います。

記

土曜懇談会開催お知らせ

期日 平成二年四月十四日(第二土)
場所 日本山岳会ルーム

14:00~17:00
お話 「山田会長を囲んで語る」

鶴岡元之助
河野 幾雄
坂倉登喜子

スイスのゴルフ場と スーパークロカンスキー

昨年十一月二十四日、マッターホルンのあるヴァリス州観光局長が来日し、一九九〇年のマッターホルン登頂一二五周年記念行事の説明をした。同行したツェルマット観光局長持参のウインパーが使ったザイル二組(一組はマッターホルンで切断した細いほうの



スーパークロカンスキー競技風景

ザイル)とビッケルを前に、当日七月十四日に行なわれる招待ゲストによる一般ルート、ツムット稜、フルッケン稜などからの登山やその他の記念行事についての説明である。

このとき、毎冬世界スキー選手権が開かれるクラン・モンタナの観光局の人が、毎年八月にここで開かれるヨーロッパマスターズ スイスオープンについて説明した。以前この会報で有志がゴルフコンペをしたという記事を見たので、参考にお知らせしたい。

クラン・モンタナにゴルフ場を造ろうと言いついたのはアーノルド・ランで、これが一九〇五年のこと。それ以来このヴァリスアルプスが望める地に二つのゴルフ場ができ、一九九〇年にはジャック・ニクラウスが設計したニクラウス・ゴルフ場(18ホール)が完成するとのことである。

またマッターホルン北西のヴェルビエで毎年五月初めに行なわれるスーパークロスカントリースキーは、山スキーの延長と捉えることもできる過酷なレースで、今後の山スキーのあり方をみる一つの例ともなるので、ここに説明したい。

このレースに使用されるコースの一部は、昔、別宮、田口二郎、高木正孝氏らがスキーツアーをしたところだが、ツェルマットからマッターホルンの北

側氷河を通過してシェンビルヒュッテ

↓テート・ブランシュ(三七二四)

↓アローラ、さらにローザ・ブランシ

ユ(三三三六)を経てマルティニ

ユの近くのヴェルビエまで標高差約四

千、全長約一〇〇をザイルやライ

トなどを結めたザックを背負い、三人

一組となって滑り、あるいはスキーを

かきつけて走り抜けるのである。このレ

イスは「氷河パトロール」と呼ばれて

いるように氷河を滑る部分が多く、お

まけに危険の監視にはスイス陸軍が関

与しているようである。

一九八九年の参加者は三人一組で、

三五一組。これまでの優勝者は男性チ

ームが八時間三七分、女性は一五時間

五二分でフランスの教師、医者、スキ

ー教師の三人からなるチームだった。

高度馴化の失敗、雪崩の危険などもあ

り、現在不参加の日本も是非参加を、

と呼びかけていたが、軍人チームの参

加も多いようで(スイス、フランス、

西ドイツ、オーストリア、イタリア)

積極的参加を薦めるにはどうかと思う

が、一考を要するレースと思ってお知ら

せしたい。

(Y・O)

ウエストンとオベリスク

田畑 真一

昭和六年の発行である山梨県山林会の『南アルプスと奥秩父』のなかには、鳳凰山の地藏ヶ岳(二八四〇)にあるオベリスク状の巨岩について、つぎのようにみえている。

「方尖石塔とは古代埃及(田畑注、エジプト)時代、神殿の門前左右に立てられた方錐形の石柱で、現に紐育(田畑注、ニューヨーク)の中央公園及倫敦(田畑注、ロンドン)のチームス河畔に建てられている。地藏ヶ岳の地藏仏は其の形態が略方錐体を示すので世人はこれをオベリスクと呼ぶに至った。」

この記事の前半部分については、何もいうことはない。至言である。ただ、後半部分、つまり「地藏ヶ岳の地藏仏は其の形態が略方錐体を示すので世人はこれをオベリスクと呼ぶに至った。」の一条については疑念をもたざるを得

タンボチエ僧院再建協力

募金者ご芳名

一万円―田中弘美、西村政晃、武井清、小田島房志。八千円―山百合の

会。五千円―柏倉信義、本多博、松村潤、中村純二。二千円―奥谷潤之助。二月六日現在累計一五六名、累計金額一、五四一、〇〇〇円。



ない。それは大づかみにみれば、これで許容されるかも知れない。しかし、厳密にみれば必ずしも妥当ではないという考えである。というのはオペリスクと呼ぶきつかけをつくった人はウエストーンであるからで、私はこれを『極東の遊歩場』のなかにみる。

「その最後の方尖のような所は、付近の谷間の農民に地蔵仏という名で親しまれている。これは地蔵の像に想像以上に似ているからである。」これはウエストーンが明治三十五年に

北岳(三一九二)への登頂をめざし、甲府方面へやってきたときの一記事である。当時は、まだ「オペリスクのような」である。この種の表現で述べる『極東の遊歩場』以降の文献についても私はあげることができる。たとえば昭和十一年に発行された『アルピニストの手記』である。このなかには「鳳凰山の例のオペリスク型岩石」とみえている。ただ、後年になるにしたがつて諸文献の多くは「オペリスク」という表現になってくる。

こんなわけで世人がオペリスクと呼ぶに至る前、すでにウエストーンが「オペリスクのような」と呼んでいた点を強調しておきたい。ちなみに関係の拙稿として「ウエストーンと地蔵が岳のオペリスク」(『新山梨』六十三)がある。参照いただければ幸いである。

(俳句)

日和田山、物見山

(年次晩餐会記念山行)

小林 碧郎

白き富士覗く 昼餉やなめこ汁

冬霞まとひ 武甲の肩さびし

ユガテとは隠れ里かも 木守柚子

残照に燃えて散るのみ 紅葉山

夜祭を隔つ 秩父嶺暮れそめし

(一九八九・十二・三)

会員通信特集(2)

この度、地元の栗ヶ岳(二一九三)頂上にステンレス浮出しの方位盤を設置し、また七合目に立派な「栗ヶ岳ヒュッテ」が完成しました。栗ヶ岳は、

三条市、下田村の道の手入れが悪く登り難いので加茂市(駅前)からバスで入って下さい。登山口まで徒歩四十分くらい。登山道は加茂山岳会の手で指導標が完備しており快適です。

新潟・宮島孝一(二六六〇)

* 元氣になりましたが、もはや登山はできません。皆様の元氣な報告が楽しみです。

* 福島・島村為男(二六七九)

* 胆石、肺炎で七ヶ月入院、目下週一回通院、点滴中。

* 大阪・川又恒一(二七二一)

* 越後支部機関誌『越後山岳』第八号の編集作業を進め、年内に発刊の予定。

* 新潟・筑木 力(二八四二)

* 今夏、山の後輩がアルプス銀座へ出掛けた時の写真を見せてもらい、実に四一年前を思い出し、改めてアルプスの壮大な自然に打たれました。

* 福島・久木春男(二八六三)

九月、ヒンズークシュを訪れ、ザニ

峠への登りにはポニーを頼むつもりでしたが、行きの機中で白簾史朗さんから峠の上までジープで行かれることを伺い、結局チトラルからギルギットまでの全行程をジープで走破しました。

* 山梨・今井友之助(二九一一)

* 当日は南仏マルセイユ方面を旅行中につき欠席します。山行は依然継続、今夏は悪沢岳でした。十一月三十五日

は宮城県船形山と泉ヶ岳でした。八十歳十ヶ月。

* 東京・川崎精雄(三〇四三)

* 馬齢を重ね古稀を迎えましたので高い山を諦め、近郊の低い山をぼつぼつ歩いています。美しい鹿島槍連峰の姿が毎日のように眺められて山麓に住む幸せを覚えていきます。

* 長野・丸山 彰(三〇九八)

* 今年七月、家内とベルナーオーバーランド、ヴァリス、シャモニと三回目の欧州アルプスの遍歴をしました。満八十歳、そろそろ杖を用意します。

* 福井・池田知幸(三三六九)

* 『六八歳の青春』で春夏秋冬それぞれの山を味わっています。主な山行は天塩岳、利尻岳、神威岳、大雪山、白雲岳等。

* 北海道・小須田喜夫(三五九三)

* 山行およびカメラ紀行、六月上高地、美ヶ原、千畳敷、高千穂高原、七月屋久島、苗場、九月大雪山周辺、十月奥日光・玉原高原、ドイツ・スイス・アイガーユングフラウヨッホ。

* 埼玉・太田 繁(三七四四)

* 昨日、孫、嫁と三人で御在所岳に登

ってきました。

三重・倉田正邦(三八二二)

最近とみに足が弱くなり、もっぱら低い山歩きを楽しんでおります。晩秋の某日、信州の最北端北国街道に沿った髻(もとどり)山に登りました七四四の小さな山ですが一等三角点があり、頂上から日本アルプスをはじめ上信越の山々が指呼の間にあります。

長野・金箱正美(三八三六)

尊敬する諸先輩もすでに不帰の方々となり、自分も何時か還暦を過ぎてしまいました。若かりし時代の無理から右足の障害が生じ、今は童心に帰り、低山のトレッキング、自然観察、野鳥ウォッチング等を楽しんでおります。

東京・大内来三(三九五四)

まずは元気で、時おり近くの低い山に登っております。

福岡・堤 甚五郎(四一六二)

昨年八月に発病(脳梗塞)し現在リハビリ中です。幸いに手足のマヒは少なく毎日散歩しています。

東京・島根康郎(四二五四)

今年は体調思わしからず、上高地四回、乗鞍岳二回、榛名山、志賀高原、

【自然保護随想】

大山の山頂から

かつてヒゲノガリヤスなどの風衝草原で覆われていた頂上は、一九六〇年頃から登山者の踏圧によって、オオバコの踏跡群落に代り、さらにオオバコも踏圧に耐えず七〇年代より急速に裸地化し始めた。そして頂上避難小屋を中心に約一ヘクタールが裸地となり、土壌流亡による母岩の露出、背丈以上の浸蝕溝の出現など、造山活動以来営々としてつくられた自然が危機に瀕した。八五年、地元、県の関係者が一丸となって「頂上を保護する会」を結成し、頂上往復約一万七千歩中、ずり落ち数多い石の中、せめて一石でも持ちあげて緑の復元に協力する「一木一石運動」を提唱して今日に至っている。しかし、年間登山者十五万人以上、そのうち五万人を越える学校集団登山をみても、この運動が定着したとは言いがたい。協力はおろか頂上碑に落書き、柵をワイールドアスレチック代りにして破損、弁当がらの集団投げ捨てなど末恐ろしい所業もあれば、一方には生徒会の方針で「山頂を守ろう」と石をあげ、カンパをして帰る学校もある。

同じ「三十数億年の歴史を背負い、五十兆の細胞生命、百四十億の大脳皮質の神経細胞を生れながら持つ」人間であり、しかも他の動植物の生命を摂って生きている以上、その貴重なエネルギーを使う方向を間違っていないと思う。

「こも伏せ」により緑化は進んだ。しかし昨年、雨水を保持する力の少い裸地から旧廃道に集中する流水によって山頂の一ヶ所が大崩壊をおこし、下方の村落に被害があった(マニング式によって試算すれば一時間五十ミリの降雨は一時間七二〇ミリの流水を起す)。その後、十月二九日の山陰集会の登山では山田会長をはじめ全員から頂上保護に協力をいただいた。それが十一月十一日地元陸上自衛隊木村司令以下六百名の「流水分散作業」への貴重な一石となった。幸いなるかな天は一つひとつの協力を結んで線となしたもう。山頂は病む、地球も病みつめる。今こそモラルがリーダーシップに問われる。一九九〇年の幕明けに当り、自然により深く心を培われた一人ひとりが登山の中で、生活の中で一つでも緑復元のために出来る仕事をする。その中で生れた英知を結集する。そして新たな仕事をする。山岳会はその共同体である重要性を感謝と共に痛感した。(小西 毅)

鉢伏山、野麦峠、雲の岳沢へ行った程度。もう少し登りたかったが残念。(八十歳の山行)

長野・百瀬一茂(四三五四)

毎日見沼田圃周辺を二〜三時間ほど歩いています。

埼玉・平井国之助(四四〇四)

一応健康体ですが年齢の故か足腰が弱り無理ができません。散歩がてら山を眺めて若かりし日を偲んでいます。

熊本・大津省吾(四四七八)

楨有恒氏の御逝去甚だ残念でした。福岡山の会二五周年に御来福いただき

記念講演をしていただいた懐かしい思い出があります。

福岡・高尾徳繁(四五四二)

ウエストン祭のポスターを毎年描いてきました。いまはウ祭の記念手帳を毎年デザインしています。

長野・金光義朗(四五八四)

* 本年は神戸大学と中国地質大学(武漢)の合同登山を劔岳で行いました。第二回の合同登山は二年後中国で行う予定。 京都・平井一正(四六三九)

* 本年は一月より毎月、西穂高に入り、山小屋の元老となった村上守氏の山の生活をまとめる撮影に入っています。来春完成予定(十六、三、五五分)。

珍しい正調安曇館の録音もバッチリです。のでフィルム委員会の御役に立てればと思っています。

東京・塚本福治郎(四六四七)

計 報

小原勝郎(本会名誉会員、会員番号一三三四番)

一月二十三日午後十時五分、脳出血のため横浜市戸塚区の国立横浜病院で死去、七十七歳。葬儀・告別式は二十五日正午、逗子市久木二一六一六の二葉会館(喪主は長男岳郎氏)で行われたが、本会からは、織内、堀田、田口、島田、今西の各名誉会員をはじめ、マナスル登山隊員、婦人懇談会委員、立大山岳部山友会関係者など多数参列し弔意を表した。葬儀に際しては、織内、今西両名誉会員より、友人を代表してそれぞれ故人を偲んでの弔辞が捧げられた。

* 今年二度にわたり山研を利用して頂きました。お陰様で久しぶりにのんびりと穂高周辺を楽しむことができた。忘年山行のプランを考えながら、赤いセーターの到着を待つこの頃です。

神奈川・山本治美(四七二四)

* 老齢のため、かつ今春ちょっとしたこと右肩の骨の頭に三本のヒビ割れができ、まだ全治せず静養中です。

秋田・武田益太郎(四七五九)

続く――

氏は、昭和初期の北アルプス鹿島槍、黒部、劔岳等での積雪期登山のパイオニアとして活躍され、戦後は、お茶の水のクラブルーム再建に尽力された他、長期間に亘り、常務理事、常任評議員等を歴任、会の発展のために活躍された。なかでも第三次マナスル登山に際しては、先遣隊長として、サマ問題を解決、本隊でも横隊長の補佐役として、登頂成功に導かれたことは高く評価されており、一九八四年十月には名誉会員として推挙されている。 本会は茲許、謹んで哀悼の意を表する次第である。



図 書
紹 介

越後山岳 第八号

日本山岳会越後支部編

越後支部の機関誌『越後山岳』の第八号が、前号から三年ぶりに刊行された。執筆者二十七名、散文と詩三四編に写真、図版、挿絵を載せている。

内容は多彩で濃密である。越後と会津の山岳の匂いが充満する中に、海外の山や峠の記事が国際調を添え、随想、詩歌、挿絵などが深い感動を呼ぶ。

佐藤一栄支部長の刊行の辞に始まり特別寄稿二編、追悼二編、論考・研究九編、紀行・記録一編、随想五編、詩歌四編、翻訳一編に、挿絵集と編集後記を載せている。

主なものを紹介する。小島六郎氏「山談・余談」は登山への段級制導入を巡る温故知新談。藤島嶺樹氏(玄さん令息)の父をモデルにしたセミフィクション「命杖」、佐藤一栄支部長と上村幹雄副支部長による故藤島玄氏への追悼の辞から、五十嵐篤雄氏「湯ノ平温泉今昔」、久保田全氏「大平晨ノ一ト」、花井馨氏「万葉集の越後歌についての考察」、山田勲氏「越後百山」筑木力氏「スポーツにおける冒険の自由と責任について」、田中純夫氏「いわゆる『絶頂の超越』についての一試論」と力作が並び、森谷周野氏の遺稿「飯豊に逝った三教師」、斎藤喜一氏「廻行中の事故と体験的救出の一方」と続く。紀行・記録では峠の四編に各執筆者の個性が滲み出て、自然観照眼がすばらしい。また平ヶ岳、矢筈岳、会津丸山岳の紀行は躍動感に溢れ、鮮烈なインパクトを与える。山崎幸和氏による「弥彦山頂からの越後山岳展望図」は空前の労作で、多分絶後かもしれない。また新潟大学山の会の海外遠征記録の集約も注目値する。

さらに滋味豊かな随想群、山田智子氏の生真面目と江田宗友氏の遊び感覚が協奏する詩歌の響き、エリックシブトン「エベレスト一九三五年の偵察」の本邦初訳と、多彩な作品が揃う。要所に配した佐藤俊彦氏の挿絵集「アルプスの旅から」も楽しい。

本書は、まことに越後支部ならではの、重厚でユニークな文献といえる。なお支部としては、今後も二年ないし三年毎に続巻を刊行していくつもりである。

平成元年二月二〇日、A5版、日
本山岳会越後支部刊、定価二八〇〇
円 (筑木力)

鳥海考

須藤 儀門著

山形、秋田の県境に聳える鳥海山は、その姿の美しさと共に、古い歴史を持つ山として多くの人に知られている。

本書は、この鳥海山に関する古代から中世にかけての歴史を、多くの資料や文献を紹介しながらさまざまな角度から検証したものである。

鳥海山の名前が歴史に登場するのは、承和五年(八三八年)五月「奉授出羽國從五位上勳五等大物忌神正五位下」という位を一階のぼらす『続日本後記』の文章からと言う。この大物忌神が鳥海山の神である。その後、噴火、地震等の災害や将門、純友に代表される地方の叛乱が起きるごとに、各地の諸神と共に位階が登って行く。平安の朝廷は、自分達の力及ばないことに對してはひたすら神の加護を願ったのである。

本書の初めで、この大物忌神の謂われや来歴を、この近くの他の山神(月山神や刈田神など)と比べながら歴史を跡付けして行く。

大物忌神と言われていた山が鳥海と

呼ばれるようになったのは、本書によると室町期からだそうである。その鳥海と言う名前が何故この山につけられたのかと言う疑問に對しては次の章で考察している。

鳥海という名前の由来は主なものでも、アイヌ語説、鳥ノ海説、チョウククライロ説、大鳥説、残雪の雪形説などと実に多くの説が語られているが、それぞれ一理はあるが決定的なものではないらしい。著者はこの一つ一つを検討し考証しているが、著者の推論として平安時代から鎌倉時代にこの地方に勢力を伸ばした豪族の鳥海氏(鳥海三郎または安部宗任)の名前に因むものであろうとしている。

この後の章で鳥海一族についての史的考証に入るが、それは山とは関係なく歴史の世界である。

本書は一口に言って山の本とはいえないが、鳥海と東北の古代史に興味を持つ人に一読を勧める。

昭和六十三年四月刊 私家版 三六一頁 定価二三〇〇円(岩瀬皓祐)

エヴェレスト初登頂の謎

トム・ホルツェル
オードリー・サルケルド 共著

田中昌太郎訳

原書の表題に相応しい部分はホルツェル氏が書いた第一章「謎」と二十章

の「手掛かり」の二章である。残る九割かたはサルケルド女史の執筆。この方は一九二四年までのエヴェレスト物語で、マロリー中心の伝記である。そして本書の評判はこの伝記部分が支えている。それはマロリー側でない者によつて、しっかりと書かれているからだ。確かに第三者の見方を思わせるものが随所に見られるほか、マロリーについての論評もマロリーの友人、知人側から集めた新たな文献、書簡など広範囲に、しかも適切に引用されている点でとくにすぐれている。マロリーに関する資料は出尽くしたろうと考える者には興味深い新しいものが盛り込まれて嬉しくなる本だ。ほぼ出版と同時に入手されたこの本を見せられたとき「こんな本が出てネ!何か未発表の資料が載っているようだ!この夏はこれを讀もうと思う!」と言われた島田巽さんの言葉が妙に耳に残った。登山史家の言う、必読の書となるかも知れない。ふと、そんな予感がしたからだ。本書の表題にもかかわるホルツェル氏がミステリーとするシナリオはどうだろうか。彼の疑問はマロリー、アーヴィンの二人が遭難する前に頂上に立ったのではなからうか、だとすれば、死に至る事故は登頂後のこと……と推考したのが出発点となった。さらにその計算根拠として、オデルが二人を目撃し

たのは第一ステップでなく第二ステップだったとするあたり。また酸素が乏しくアーヴィンを途中で置き去りにしてマロリーが単独で登頂し、帰路下降時に事故を起こした。とするホルツェルの謎解きは、一九三三年隊が発見したピッケルとの強引な辻つま合わせと見られなくはない。このような異説の展開には反対意見があつて当然。『アルパイン・ジャーナル88/89』には一九三八年のエヴェレスト・ピーター・ロイドが全く否定的な書評を寄せている。そののみかウイン・ハリスによる酷評をも引っぱり出している。しかしサルケルドが書いたマロリー伝の力作には高い評価をして「エヴェレストの歴史に加えられる本物だ」と惜しみない讃辞を送っている。マロリーを、あるいはエヴェレストを研究する者には、この方が戴ける筈だ。原題「The Mystery of Mallory and Irvine」。

一九八八年六月十日 中央公論社刊
四六版 三二一ページ定価一八〇〇円 (杉田博)

雲の上の支配人

神 憲明著

この本は穂高岳山荘の支配人を二十三年間務めあげ、今回、退職した著者が、その在職中のできごとを一冊にま

とめたもの。先に今田重太郎が書いた『穂高小屋物語』が創設者・経営者としての本なら、これは使用人兼務役員が現場から捉えた様子を綴ったもの。

神憲明といえは十六、映画『穂高岳讃歌』やこの本のカバーにも載っている槍・穂高連峰詳細図で知られた、何ともズクのある仕事をする人だが、この本を読んで、一年のうち二百日を山で、あとの百数十日を都会で暮すという変則的生活を二十三年間も続け、それに耐えてきた著者の生き様を知ることが出来る。

野に咲く百合の花の美しさを識ることが出来るのは、狭き門から入れる者のみ、という西洋の哲人の言葉があるが、二十三年間養ってきた心情にさらに研ぎがかり、山の生きもののたちの良い映画をこれからも数多く撮り続けていくって欲しいと思う。

一九八九年九月一日、山と溪谷社刊
二四八頁、定価一三〇〇円

(岡沢祐吉)

報告

羽衣のお餅

関西支部

年次晩餐会の折、織田沢美知子さんに関西支部のお餅搗きに参加の申し込みを受けた。

その十二月十七日は終日穏やかな日曜日で、今西邸の裏庭には二張りの大テントがたち、井関・柿花さん調達の調味料等が揃うと、二升入りせいろ、三段重ねの最上部から、早くも蒸気が上る。

東京から七月、十月に赴任された方、常連の家族連れが三々五々集ると、杵の音が快よい。素足に桐の下駄履きの今西さんは搗き上ったお餅を白から引き上げて、のし台にとり、ころりと千切ると子達が小餅に丸める。ご婦人は大根をおろし、納豆や黄粉の準備に大忙。一斗五升の糯米は鰯入り、黒ごま、うす紅色のえび、青のり入りと羽衣のお餅は丸餅に仕立て上る。

日だまりでお酒盛りが始まると、差し入れの豊橋の濁り酒が「どーん」と体に染みる。「関東煮」がぐつぐつ煮え立ち、酌み交す一升瓶に金粉がキラリと光る。金井良さんの長男君が山岳用自転車で見れると逞しい成長振りにこの十年のことが甦える。

子供達はテニスコートで毬を投げ、庭の竹の葉の舟を水に浮かべ、はては裏の浜寺公園に飛んで行く。

大人は北向きの玄関に掲げられた福島清さん描く「鹿島槍ヶ岳」をみせていただく。阿部さんが「これが今西ルート、これは徳永、これは阿部ルート

よ。」と頂稜に伸びる襷を指された。白川義員さんの撮られた「マナスル」はもえたって、また頂上の石で作られた楽焼と、千宗室さんの銘「無類」大桶焼のお茶碗を拝見した。

四十二人が相集い、家苞を抱えて散ると歳晩の日は大分西に廻った。来年もまた羽衣のお餅を賞味しましょう。

〔参加者〕 今西寿雄、織田沢美知子、片岡演子、園木邦子、水谷透、柿花道子、篠崎仁、川俣俊一、山形歳之、井関扶、安井康夫、金井健二、金井良碩、阿部和行、入谷浩右、小寺美佳、村井葵、宗實二郎、宗實慶子、以上会員十九名 配偶者四名 子九名 孫七名 お手伝さん二名 会員外一名

(宗實慶子)

第一回 藤木祭開催

関西支部・桑田 結

第一回、藤木祭が平成元年十月一日午後一時より、晴天のもと、六甲・高座の滝のレリーフ前で、盛大に開催されました。

関西の岳人の誰しもが心の一隅に、藤木九三さんのレリーフの事を思っていた。設置後、二十七年が経ち、ご本人も他界され、発起人の方々も、個々には、気には留めておられたと思いま

すが、レリーフはほとんど、掃除をされることもなく、今日に至っておりました。

日本山岳会関西支部の委員会において、浅野清彦氏から「藤木九三さんのレリーフの清掃と集会を持ては……」と提案があり、委員の賛成を得て検討をはじめた。

兵庫県山岳連盟と大阪府山岳連盟に呼びかけて、三者で実行委員会を設置して準備をすすめることになりました。

以後、会合は兵岳連のお世話で神戸登山研修所で開催しました。

開催日時・場所の検討の結果、開催月日は生誕日に近い十月一日、場所は狭いだろうが、やはり高座の滝の前ということに決めた。唯、時間をよく吟味して、午後一時～二時の閑散な時間を選びました。さらに、地元、芦屋市とも話し合って、協賛行事として、とりあげて頂きました。

事前のレリーフ清掃・前日の最終打ち合せ、準備万端、整いました。あとは晴天を待つばかりです。

当日は、素晴らしい晴天でした。雨の多かった九月が過ぎ、行楽の秋を迎えた、ロック・ガーデン入口は、朝から、沢山のハイカーで大変な混雑で、トラブルの無いことを祈るばかりでした。

定刻、午後一時、浅野氏の開会の辞で藤木祭は、はじまった。遠来の参加者へのお礼、藤木祭開催の話。

今西寿雄・前JAC会長の挨拶

藤木九三氏のこと、RCCのこと、相変らず見識の深い、お話に出席者一同、多に感銘を受ける。

山村康六・芦屋市長の挨拶

市長、自らご出席頂き、行政として、最大の協力を約され、今回も、途中の登山道の整備をされたことを話された。

ここで飛び入りで、吉沢一郎様に挨拶を頂きました。八十六歳という高齢にもかかわらず、わざわざ東京からかけ付けて頂き、力強いお話に出席者一同大いに感動した。

藤木高嶺氏に「父の思い出」というテーマで講演して頂いた。父・九三さんとの山行。ご本人の高座でのキャンプ生活など、興味深いお話でした。

全員で雪山讃歌を合唱

乾杯は、大阪府岳連の玉井氏の発声閉会の辞は、兵庫岳連の川崎氏。今回は、はじめてということで、参加者がどの程度なのか、判断が難しかった。しかし、予想通りの参加者で主催者として、非常にうれしい結果となった。この会合が、岳人の間に定着して、長く開催されることを願うものである。

三水区新年山行

三水区恒例の新年山行は、秩父長湊の宝登山神社にお参りし、野上峠を越えて、寄居の山崎屋旅館で新年会。翌日は釜伏峠から釜山神社を経て、日本百選の名水、日本水を訪ねるコースを総勢二十七人でかけた。

宝登山神社は標高四九七メートルの宝登山中腹にある古い社で、三峰神社、秩父神社とならぶ秩父三社のひとつで、日本武尊と巨犬の伝説にまつわる宝登山頂には、厄除、火防の神を祀る奥宮があつて多くの信仰を集めている。

宝の山に登ると書く宝登山は、新年に登るにふさわしい縁起のよい山である。私たち一行は、西武秩父駅からタクシーを連れ、宝登山神社から、さらに、ロープウェイに乗り継いで、歩かずに山頂にきてしまった。

ことしは元日から天気がよく、おだやかな日が続いていて、きょうも晴天で暖かい。

宝登山一帯は自然公園になっていて、四季おりおりに楽しめる絶好の行楽地になっている。枯木越しの山頂から西上州の山やまの眺めがすばらしかった。山頂の日だまりで、みな、輪になって背負いあげた秩父の地酒と山海

の珍味で舌つづみをうった。

下山路は宝登山から野上峠にでる予定を変更して、動物園の野猿公苑で遊び、ゆっくり長湊駅にくだった。

夜は寄居の山崎屋という、むかしの旅籠屋を思わせる旅館で、もてなしの鱈酒を酌み交わし、新年の抱負を語り合った。

翌朝、山崎屋旅館から釜伏峠まで、全員タクシーに分乗して釜山神社に参拝。山間の日影になった参道には、三種の木に蕾がたくさんついていた。

釜山神社から日本名水百選の日本水へは、釜山神社の裏手から、尾根につけられた鎖場をくだってゆく。ちょっとスリルがあつて、おもしろかった。

日本水は、ちょうど釜伏山北面にあたるところに百畳敷岩といわれる大巨岩があつて、こんこんと水が湧き出ている。そこには、日本水大神が祀つてある。

昔、日本武尊が東征のおり、釜伏山に戦勝を祈願した。そのとき、のどが渴いたため剣を岩壁に刺したところ、たちまち水が湧いたという。地元の人たちから子授け、安産、不老長寿の霊水として珍重され、のちに日本名水百選に指定された。私たちは不老長寿にあやかるため、わざわざこの霊水を汲みにやってきたのだ。

わが恵方尾根の鉄鎖を伝ひゆく

吉武玲子

日本水の水場で小休止したのち、日本水を源とした風布川添いのみかん栽培の村にのりた。このみかんは北限の地として有名らしい。みかん園の庭先にあつたテーブルを借り、みなで昼食をとった。

二日間、天気に恵まれ、午後二時ごろ全員、秩父鉄道の解散地、波久礼駅に着いた。

解散後、有志で小川町の二葉に寄り、地酒、帝松と忠七めしで打ち上げの祝杯をあげた。

とき、平成二年一月六・七日。

〔参加者〕 坂倉登喜子、高田真哉、片岡博、齊藤健治、木村俊博、石田稔郎、中保、重村清、遠田栄・篤子、乾能尚、岡野修、鈴木正俊、横溝修一、河野幾雄、河野之保、小林碧、川上光久、岩堀瑞子、滝沢ちよ子、菅野弘章、橋本雅子、渡辺正雄、吉武玲子 外三名。

(吉武玲子)

関西支部五十年史の発行について

金井 良碩

この程、関西支部の五十年史が関西支部の手で刊行され、その出版披露の記念パーティーが去る平成二年一月二四日、大阪の東洋ホテルで催された。

阿部和行支部長が挨拶に立ち、「関西支部も発足以来五十余年もたち、当時の事情を知る先輩方も少なくなってきた。今まとめておかないと、恐らくは不可能になるのではないかと、いう気持ちで五十年史への取り組みが始まった。」と述べると共に、出版にかかわるエピソードの披露や会員の協力に対する謝意が表せられた。

来賓として出席された山田二郎会長、尾上昇東海支部長がそれぞれ祝辞を述べ、今西寿雄前会長の発声で乾盃し、祝宴となった。この会は関西支部の新年会も兼ねており、総勢百二名という盛大な会であった。詳細は平成二年二月発行の関西支部報に報ぜられることになっている。

さて、五十年史は、「支部の五十年」「支部の事業」「歴代支部長のプロフィール」「思い出の人たち」の四部構成で編集され、末尾に年表が加えられている。A五版、三〇四頁でコンパクトにまとめられているが、昭和十年の支部の発足前後、昭和二十三年の新支部への移行前後を中心に編集され、当時の山登りの模様や考え方、関西気質対東京意識というものが随所に表われていて興味深い。年史の性格上、古い話は山岳や会報から引用されたものも多いが、項目ごとに整理され、一般には手に入らない書物からのものも再掲

雨具をめぐる

シンポジウム(3)

科学研究委員会

ウールは繊維内部の多数の細胞・孔隙に水分を多量に吸蔵するにもかかわらず、繊維表面は濡れ難くて繊維間隙には水が入らず、断熱性の高い空気を沢山含む。このため体温が奪われることはない。これに反し木綿は繊維間隙にも繊維内部にも多量の水分を吸蔵するので、急速に断熱性が低下し、体温を保つことができなくなる。

一方ゴアテックスなどの透湿性雨具を冬期に着用した場合、着衣がダウンやウールだと、肌から汗が出て、一旦ウールに吸収され、その後少しずつ蒸発して雨具内面に達する。その後一部はそのまま透湿膜を通して外に蒸発して行き、他は再びウールに吸収されるので、時間が経過しても雨具内面が氷結することなく、肌表面の湿度が上昇することもない。しかし着衣がポリエステル等の人工繊維の場合、人工繊維は一般に吸湿性が極めて低いと

め、肌から出た汗はポリエステル生地を通して直接雨具内面に達し、氷結してしまう。この結果雨具の透湿性や断熱性も低下し、皮膚表面の湿度は高く、体温も下がる。

もちろん零下二〇℃ともなれば、ゴアテックスであっても内面に氷結が見られる。低温時の雨具については一考を要するのではなからうか。

◇ ◇ ◇

以上シンポジウムの大凡の内容であるが、時間が少く、質疑の時間を十分にとれなかったことは残念であった。

ここで私見を少し述べさせて頂きたい。確かに春山などではゴアテックスは完全で、何日間もの縦走中、ミゾレなどに遭っても全く問題はなかった。しかし夏の屋久島などではムレがひどく、殆んど透湿の効果は認められなかった。一方冬の北アルプスなどでは、雨は降らず、雪と風と寒気が問題なので、軽いヤッケの方が遥かに有効であった。今後は用途別の製品が必要になってくるのではなからうか。その際パツチワークとか目方、体積それに価格

らにより、また、新支部発足当時について今西寿雄、泉隆次郎、浅野清彦、大賀寿二、大橋秀一郎、徳永篤司、らによりそれぞれ座談会形式で語られている。二つの座談会の際に五十年の記

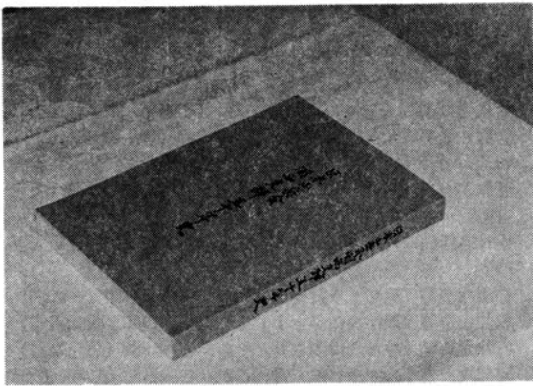
の引き下げも問題になるだろう。一方雨と風と雪に対する山用装備としては、リュック蔽いとか、テント生地、傘なども併せて討議の対象とした。今回実現しなかった縫製面からの発表と共に、近い将来、もう一度このようなシンポジウムの開かれることを心から期待するものである。

出席者(順不同) 安田武、斉藤利忠、

西川演、松永敏郎、中川武、徳久球雄、松丸秀夫、松田雄一、高遠宏、千葉重美、石田要久、中村純二、中村あや、梅野淑子、石井恵美子、木村カズコ、井上久子、中島源雄、内藤勇、秋元英郎、佐野正之、橋本行雄、入澤郁夫、松沢君子、田久保勇治、丸茂キクエ、錦織保清、古屋紘、南井英弘、雨宮節、滝正子、鈴木みち子、南川金一、曾野田肇子、林一枝、鳥居亮、斉藤敏男、砂田定夫、小川悦代、松村潤、岸榮、関清、梨羽時春、阿部隆子、吉田実、小川隆、北野忠彦、佐久間正子、久保孝一郎、森唯正、穴田雪江、時田えみ子、沼田洋一 以上五十三名

(中村純二)

録がサンドイッチにされているが、中でも富田健一による「関西支部の戦中戦後」は支部報に八回に渡り掲載されたものを加筆再掲載しているが、筆者の几帳面な記録によりこの激動の時代



刊行なった関西支部五十年史

の山岳会活動が手にとるように解る。「支部の事業」では研究会や集会等支部事業の変遷を紹介しているが、遠征等の大きなプロジェクトが今日まで遂にはまともになかった関西気質の背景が読みとれる。そんな中で、営々と五十年の歴史を築いた世話方の苦勞もまた、捨てがたいものがある。

「歴代支部長のプロフィール」では篠田軍治、津田周二、水野祥太郎、今西寿雄の四支部長について、「思い出の人たち」では関西支部ゆかりの故人について、それぞれ登山界はもちろん、仕事面や私的な面を含んだ思い出が語られ、先輩達の足跡を偲ぶことができる。あわせて、関西支部発足につ

いてRCCの果たした役割の大きさが感じとれる。

発行部数五百部、支部会員や関係者に配られる外、約百部が希望者用に印刷されている。費用は送料込みで四千人、葉書で関西支部まで申し込めば手に入る。多少誤植もあり、素人集団の編集で書籍としての体裁は限らずしも立派とはいえないが、内容的には十分読みごたえがある。残部の売れ行きによっては、ハードカバー版の製本も企画されている。

第二七回 木暮理太郎翁 碑前懇親会報告と 次回の予告

山村 正光

第二七回、木暮碑前懇親会は、一九八九年五月二〇日、金山平の碑前祭から始まった。今回は記念感話を望月達夫名誉会員にお願いした。

本会でも木暮先生を存じ上げない会員がほとんどである。集って、ただ酒を飲むだけでなく、木暮先生の生き証人のお話は沢山きいておなくてはと思った。

一方、木暮先生を終生の師と仰いでおいでた、故神谷恭さんのお孫さんの後藤典重さん、故山崎金次郎さんの御

長男、山崎郁郎さんが見えになった。このことは、会を主催する者にとってうれしいことであった。

時は、山菜の最盛期、堀口丈夫シェフの下、お勝手番は腕をふるった。それに、アルコール、各地の名産など、沢山の差し入れを有難くいただいた。特に、三井松男前支部長家からは、高価な煮貝を今回も拝受した。

翌二日、記念山行は、甲府盆地の東端、中央道釈迦堂パーキングエリアの裏、蜂城山の頂に立った。参加者中これに登ったことのある者、わずかに四人という穴場の山である。曇り日で展望はなかった。東にかすかに踏跡をたどり、水分から桃畑の中をくだり、新装なった、釈迦堂遺跡博物館を見学。大休憩舎で昼食、来年の再会を約し、流れ解散となった。

【参加者】(アイウエオ順) 荒野康子、石垣政雄、石間信夫、磯野兼二郎、乾能尚、今井喜美子、今井洋地、岩堀瑞子、内山城、遠藤靖彦、大西恵子、岡野修、岡部みち子、笠原忠夫、笠原玲子、川上光久、河野幾雄、後藤典重、小林啓助、小林基子、小松崎和子、小松崎幸子、込田伸夫、近藤友好、近藤久子、斎藤健治、坂倉登喜子、里見清子、篠原健夫、島田巽、高田真哉、田中久男、田村英也、鶴岡元之助、鳥居亮、林喜一、平井和雄、藤宗正彦、堀

口丈夫、中村久美子、滑志田けん、滑志田隆、滑志田ひとみ、滑志田りょう、前田清子、三輪玲子、望月達夫、森武昭、山崎郁郎、山村秀子、山村正光、山本麻子、山本稔、渡辺富士子 以上五十四名

第二八回碑前懇親会は左記要領で行います。

日時 五月一九日(土)～二〇日(日)
場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山平
宿泊 右同、有井館

TEL 0561-45-0455
会費 八五〇〇円 宿泊、食事、記念品、山行交通費をふくむ

交通 JR中央線韮崎駅下車、増富ラジウム温泉行きバス終点下車、舗装道路徒歩九〇分(タクシーの便あり)

行事 一九日 一七時より碑前祭、一八時より懇親会
二〇日 中央道甲府南インターを経て鳥坂峠まで車。春日沢の頭(一二三・五・一) 三等三角点)登山、JR石和駅にて解散、徒歩時間二時間半、急な登降はほとんどなし。

申込 千400 甲府市武田三ー六ー二七、山村正光 TEL 0562-51-3175
五月一〇日まで 定員五〇名

図 書 受 入 報 告

図 書 委 員 会

平成元年 12 月受入図書

1. 鬼窪善一郎著「黒部の山人」白日社 1989 (版元寄贈)
2. 内田嘉弘著「山のスケッチ百山紀行」ナカニシヤ 1989 (著者寄贈)
3. 横山厚夫著「東京から見える山を歩く」山と溪谷社 1989 (版元寄贈)
4. 神戸大・中国地質大合同登山隊編「チェルシー山初登頂」同登山隊 1989 (編者寄贈)
5. 長尾三郎著「精鋭たちの挽歌」山と溪谷社 1989 (版元寄贈)
6. 丸山晴弘著「山旅湯旅」ケイシーシー 平成元年 (著者寄贈)
7. 川喜田二郎監修「今西錦司 その人と思想」ペリカン社 平成 1 (購入)
8~18 までは第 22 回図書交換会で購入
8. 窪田空穂著「日本アルプスへ」天竺堂書房 大正 5
9. 宇津木政雄著「天気予報の手引」日本気象協会 昭和 50
10. 日本山岳協会刊「第 14 回海外登山技術研究会資料」昭和 51
11. 日本山岳協会刊「第 15 回海外登山技術研究会資料」昭和 52
12. 日本山岳協会刊「第 13 回海外登山研究会 報告書」昭和 50
13. 日本山岳協会刊「第 14 回海外登山研究会 報告書」昭和 51
14. 日本山岳協会刊「第 25 回海外登山研究会 報告書」昭和 62
15. 日本山岳協会刊「1978 年海外登山隊報告書, 第 17 回海外技術研究会」1978
16. 日本山岳協会刊「1980 年海外登山隊報告書, 第 19 回海外技術研究会」1980
17. 日本山岳協会刊「1981 年海外登山隊報告書, 第 20 回海外技術研究会」1981
18. 日本山岳協会刊「1982 年海外登山隊報告書, 第 21 回海外技術研究会」1982
19. 斎藤清明著「今西錦司—自然を求めて」松籟社 1989 (著者寄贈)
20. 深町達也著「ヒマラヤペダル越え」文芸春秋社 1989 (版元寄贈)
21. 和泉雅子著「笑ってよ, 北極点」文芸春秋社 1989 (版元寄贈)
22. コーボルト会編「コーボルト 60 年・そして 20 年」同会 昭和 63 (発行者寄贈)
23. 中西俊明写真, 山口耀久文「南アルプス」時事通信社 1989 (版元寄贈)
24. 遠藤正雄著「失われた魂 チベット」時事通信社 1989 (版元寄贈)
25. 高谷昌良著「芦屋の山」山と溪谷社 1989 (版元寄贈)
26. 福島静雄著「遠い山近い山」山と溪谷社 1989 (版元寄贈)
27. 新井幸人著「尾瀬 四季と花」偕成社 1989 (版元寄贈)
28. 西村, CJ 編集部編「冬期クライミング」白山書房 平成元 (版元寄贈)
29. 北山クラブ著「北山百山 レポート集」同クラブ・ナカニシヤ発売 平成元 (版元寄贈)
30. 宮尾巖雄編著「ツキノワグマ 追われる森の住人」信濃毎日新聞社 平成元 (版元寄贈)
31. 吉野裕子著「山の神」人文書院 1989 (版元寄贈)
32. 菅原聰著「人間にとって森林とは何か」講談社 1989 (版元寄贈)
33. 南日本新聞取材班編「火山と人間」岩波書店 1989 (版元寄贈)
34. 柿沼克市著「尾瀬」下野新聞社 1988 (版元寄贈)
35. 石井光造著「静かな山歩き I」そして 1989 (版元寄贈)
36. 石井光造著「静かな山歩き II」そして 1989 (版元寄贈)
37. 岡部牧夫著「人間は自然を守れるか」三一書房 1989 (版元寄贈)
38. 上毛新聞社編「群馬の山歩き 80 選」上毛新聞社 昭和 61 (版元寄贈)
39. 井原俊一著「森に新風が吹く日」朝日新聞社 1989 (版元寄贈)
40. M.S. Kohli "Mountaineering in India" Vicar 1989 (山田二郎氏寄贈)
41. H. McManners "Crowning the Dragon" Grafton 1989 (購入)
42. R. Messner "The Crystal Horizon" Crowood 1989 (購入)
43. R. Messner "All 14 Eight-Thousanders" Crowood 1988 (購入)
44. J. Pilkington "Into Thin Air" George Allen & Unwin 1985 (購入)
45. J.B.L. Noel "Through Tibet to Everest" Hodder & Stoughton 1989 (購入)
46. C. Bonington "Quest for Adventure" Hodder & Stoughton 1987 (購入)
47. R. Bellamy "Walking the Tops" David & Charles 1984 (購入)
48. H. Brown "Climbing the Corbetts" Gollancz 1988 (購入)
49. M. Moran "The Munros in Winter" David & Charles 1986 (購入)
50. W.H. Murray "Mountaineering in Scotland & Undiscovered Scotland" Diadem 1979 (購入)
51. I. Butterfield "The High Mountains of Britain and Ireland" Diadem 1988 (購入)
52. J. Bassindale et al., "Holding the Heights a rock-climbing diary" Constable 1987 (購入)
53. K. Wilson "Extreme Rock" Diadem 1987 (購入)
54. K. Wilson "Hard Rock" 2nd ed. Granada 1985 (購入)
55. N. Nicolson "The Himalaya" Time Life 1975 (購入)

山の環境保全の立場や、エネルギー問題の立場から、自然エネルギーの利用は大切な問題です。山小屋や遠征基地における実用化状況を中心にシンポジウムを開きますので、多数ご参加下さい。

◎自然エネルギー利用のシンポジウム



☎ 234-6659

この電話でもお知らせしています

小原 勝郎 (一三三四)

1・23

物故

会員異動 1 月

1 月来室者 269 名

- | | |
|------|---------------|
| 24 日 | 図書委員会 |
| 23 日 | 自然保護委員会、婦懇 |
| 22 日 | 総務委員会、フィルム委員会 |
| 19 日 | 常務理事会 |
| 18 日 | 科学委員会、婦懇、学生部 |
| 17 日 | 山研委員会、三水会 |
| 16 日 | 資料委員会 |
| 12 日 | 総務委員会 |
| 11 日 | 評議員会、理事会 |

・ルーム日誌

(1 月)

日時 五月十二日(土)

午後一時半～五時

場所 青山学院大学総研

ビル(正門入った右側)

十一階会議室

演題と講師

①総論 鳥居 亮

②山小屋

(1) 蕎麦岳山荘

今田英雄

(2) 本沢温泉・赤岳頂上

小屋 原田 茂

(3) 白馬山荘 原田恒久

(4) 簡易電源システム

本多潤一

③海外

(1) 三国合同登山隊

貫田宗男

(2) ヒマラヤ 大蔵喜福

(3) 南極およびヨーロッパ

木村茂雄

④質疑応答およびまとめ

森 武昭

科学研究委員会

●第二十一回

山岳図書を語る夕べ

題目 ロシアの山と探検

の本

講師 田村俊介

日時 四月二十日(金)

午後七時より

場所 日本山岳会ルーム

◎新入会員及び新旧会員交流

さくらハイク

○大平山(標高三四三三)

歩行時間約四時間

日時 平成二年四月十五日(日)

東武日光線新大平下駅前

九時三十分集合

会費 五百円(写真代他)

申し込み・問い合わせは事務局へ。参加希望の方には資料をお送りします。

(雨天中止)

総務委員会

平成二年三月二十日

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京(03) 四四三三

振替口座東京三二四八二九番

東京都港区赤坂一三三六

印刷所 株式会社技報堂